

## 第五章 まちのすがた すまいと暮らし

### 第一節 新しい居住形態の幕開け

#### 一・マンションと企業住宅の形成

**邸宅跡地にマンション建設** 昭和三十年代までに形成された市街地では、木造戸建家屋が中心であった。しかし、四十年代に入り、屋敷町に新たな居住形態が登場する。宅地面積の広い邸宅跡地やその周辺などに、マンションが形成されていく。特に山手や芦屋川沿いに顕著にみられる。マンションの立地は、鉄道駅周辺や本通・三八通商店街といった利便性が高い中心部ではなく、むしろ山手や芦屋川沿いなど風光明媚な環境をもつ周辺部で建設が始まった。

昭和四十四（一九六九）年には芦屋グランドハイツ（山手町）、芦屋アーバンライフ（西山町）、芦屋ヴィラ（岩園町）、芦屋ロイヤルハイツ（岩園町）などが建てられた。また、ケータリングのフランス料理店が入店するシャトー芦屋（朝日ヶ丘町）などもみられた。

芦屋川沿いでは、右岸下流の芦屋サンプラザ（平田町）、左岸に松浜ハイツ（松浜町）、コープ芦屋（松浜町）などが、松林の続く芦屋公園に隣接する風光明媚な敷地に建設されていく。

**企業寮と企業社宅** 市街地の多くをしめた戸建建築の他方で、市内には昭和四十年代からは企業寮も目立ってくる。これらは特に旧海岸地域において集積している。当時そこには、住友化学、神戸銀行、三菱銀行、日商、富士銀行、神鋼商事、東京海上火災、第一銀行、日綿実業、日本銀行、森下仁丹などがあつた。昭和三十年代まで海水浴場として賑わつた浜辺に形成されていた別荘地も、砂浜の埋め立てが進むなかで、企業社宅へと変容していった。

企業社宅は、山手にも点在するが、海岸部のような集積はなく、一部、翠ヶ丘町に福岡銀行、富士銀行、日商の寮が集まつていた。市内東部（旧打出村）にあたる山手に住友、浜手に川崎製鉄と大規模な企業社宅が形成されていった。

このため市内小中学校では、社宅に入る転校生も多く迎えることになり、生徒たちも学期ごとにお別れを迎えなければならなかつた。

## 二、ため池と橋

**ため池の風景** 住宅街に新たな景観が形成されていくなかで、それらと共存していた農村風景も変容する。別荘地開発が先行した西部の菅屋川流域は既に戦前に市街化していたが、東部の宮川上流には農村風景が広がり、農用水となるため池も朝日ヶ丘町や岩園町北部には残された。仲ノ池（岩園町）は釣り池や子ども遊び場として賑わい、朝日ヶ丘町では釣堀となり、子どもの日には小学生対象の釣り大会も開かれた。ため池は、田

園周辺では風景を形成するだけでなく、市民の土筆狩つぐしの場や子どもの遊び場となり、このような風景が昭和五十年代までつづく。

### 芦屋の橋物語

本市は、西部に芦屋川、東部に宮川と、川を中心としてまちが形成され、その発展に伴い数多くの橋が架けられてきた。芦屋川と宮川とでそれぞれの個性が生まれてきた。芦屋川には、この地が舞台となった能楽や歴史にちなむ名が刻まれていく。南から鶴塚橋ねづかばし、公光橋、業平橋、月若橋など、文学的な命名がされてきた。

一方、宮川では、芦屋川よりも数多く橋が架けられていったことで、芦月橋、常盤橋、水道橋と、多彩な命名が行なわれていく。また橋が地域コミュニティの核となり、下流部では橋ごとにお地藏さんが飾られ、夏の地藏盆も盛んに開かれていく。中流域には邸宅からも橋が架かり、個人的に命名されたものも少なくない。ほかに岸ノ郷橋などの旧字名や、戦前の別荘地名である有楽橋など、多彩な命名の橋が架かる。

本市の開発は戦前から橋に特徴をもつ。昭和初期の六麓荘の開発には、住宅地を流れるドンドン川に一〇の橋が架けられ、それぞれ日の出橋、雲溪橋、虹見橋など、意匠の異なる石橋が架けられ、戦後の芦屋霊園における開発にも引き継がれている。

昭和三十年代から始まる芦有道路開発においても、同様に個性的な橋が誕生していく。そこには、わが国でも先駆的なアルミニウムを使用した橋脚など、創意がみられ、芦屋のまちの風景を飾っていくことになる。平野橋、西村橋など芦有開発株式会社の役員の名が橋に刻まれていった。



5-1 宮川河口からの汐見橋（手前）、  
宮川大橋（後）

一方で市街地形成のなかで、芦屋川では、昭和三十五（一九六〇）年、永保橋がなくなり、また昭和四十二年には、公光橋が木造から鉄筋へかわるなど、名橋も移り変わっていく。宮川は、埋め立てによって海へのび、汐風橋、宮川大橋、汐見橋と、また新たなタイプの宮川の橋が増えていく（5・1）。

こうしたまちの交通や開発によって、そこに架かる橋がまた新しい風景を形成していく。その一方で、交通の変化によって昭和四十九年、国道二号の風景となっていた阪神国道電車が廃止され、一つの風物が消えた。

### 三三 山へ海へ延びる芦屋

#### 山と海の開発

山と海がせまる本市は、市街地形成のためには、山へ海へ広がっていくしかなかった。本市の山地開発は、昭和三十六年に芦有ドライブウェイの開通以降、昭和四十四年に奥池町一帯の第一工区の工事が完了し、住宅地には、企業保養所や研修施設も形成された。昭和四十八年には、奥池南町一帯の第三工区が完了し、「芦屋ハイランド」と名づけられた。山の上に生まれたニュータウンではあったが、戸建住宅を中心とする開発は、戦前に既存樹林を残しながら行なわれた六麓荘との共通点も少なくない。奥池地区は瀬戸内海国立公園に



5-2 キャナルパークからの高層住宅

には、大型ショッピングセンターという真新しさもあり山手地域からも多くの人々が訪れることになる。また市民体育祭や各種スポーツ競技において、これまで市民グラウンドなどが中心であったが、シーサイドタウンに新設された野球場やテニスコートでの開催に広がりを見せていく。

囲まれ環境が活かされた開発となった。

同時代、海へ広がったシーサイドタウンには、それまでの市街地とは対照的な景観を形成していく。昭和五十年三月に造成が完了し、芦屋浜住宅団地の建設が進展していく。当時周辺の都市では、臨海部の工場誘致が進められてきたなかで本市が選択したのは住宅都市計画であった。昭和五十四年に高層住宅への入居が始まる。この高層住宅は、日本建築学会賞を受賞する。シーサイドタウンの中央に生まれたダイエー

## 第二節 村の伝統とモダニズムの再発見（昭和五十年代）

### 一．伝統行事の再生



5-3 あしや秋まつりに集合しただんじり

「だんじりの復活と「ハワイまつり」」がスタートする。奥池東側の水辺に野外ステージと、芝生の観覧席が設置され、ハワイ・オアフ島の舞踊団による歌と踊りなどが七月二十四日から八月二十四日まで開催された。ハワイまつりは昭和四十三年まで開催され、この期間に一〇万人前後が集まった年もあったようだ。

新しいまちに祭りが生まれるなかで、市内では伝統的な祭りが復活してきた。市内における祭事としては、十月十五・十六日に芦屋神社、十七日に打出天神社の祭りが行なわれていた。都市化の進行によって、祭りが衰退していくなかで引起こされただんじり処分問題がきっかけとなり、逆に祭り復活へと機運が高まった。

昭和四十八年「山之町地車愛好会」が発足し、だんじり巡行が行なわれた。翌昭和四十九年には「打出」にも組織がたち上がり、それぞれの

地域で巡行された。巡行する際には二基が市役所で合流することとなった。

昭和五十七年に「西之町」、同六十二年に「精道」、平成二年に「三条」が巡行をすることになり、あわせて五基が「あしや秋まつり」を盛り上げるようになってきた。

だんじりは、もともとは氏神であった芦屋神社や打出天神社の祭事にあわせて巡行していたが、現在では十月中旬の土日に巡行されている。神事としてというよりも、新たなまつりとして賑わいをみせている。

本市のまつりとしては、「業平まつり」(昭和二十七年)、「あしやまつり」(昭和三十三年)、「あしや岩まつり」その後あしや山まつりと改称(昭和三十六年)などが行なわれて、祭りが少しずつ形をかえていった。昭和五十四年から「芦屋サマーカーニバル」が、昭和六十三年から「芦屋さくらまつり」、平成元年から「あしや秋まつり」(5・3)がスタートしている。

## 二. 阪神間モダニズムと洋館

### 近代建築のその後

昭和四十年代以降の、市街化の進行は、歴史的にストックされてきた建築にも少なからず影響を与えていく。本市における歴史的建造物には、旧村落部における日本建築もみられるが、特徴的なのは大正期から昭和初期にかけて大阪財界人による郊外住宅地として花開いた阪神間モダニズムといわれる一連の建築である。なかでも洋館建築は、戦後においてもランドマークとしても親しまれてきた。しかし、それら建造物のなかには姿を消していくものも少なくなかった。ほとんどが個人所有であり文化財に指定されることなく消滅



54 松山與兵衛邸  
(現) 打出教育文化センター

した。昭和二十九(一九五四)年に市立図書館として買収された松山與兵衛邸(打出小槌町 5・4)などは建築が保全されることになったが、そうした例は少ない。また企業や団体所有となって共済組合声屋会館(旧藤井邸・山手町)のように維持されたものもあった。

このような名建築が建つ敷地は、先にみたように、昭和四十年代からはマンシヨン建設用地となっていた。それは世界的な名建築であつても同じであつた。近代建築における世界的建築家フランク・ロイド・ライトにより設計されていた山邑太左衛門邸(山手町)を、昭和四十六年、取り壊して、跡地にマンシヨンを建設するという計画が持ち上つた。しかし、専門家や市民による働きかけに、所有者が全面

的に協力しマンシヨン建設が撤回されている。昭和四十九年には「旧山邑家住宅(ヨドコウ迎賓館)」は大正建築としては初めて国の重要文化財に指定された。また継承されてきた近代建築としては、山口吉郎兵衛邸(山芦屋町)が、昭和三十九年に滴翠美術館として引き継がれている。

市内において親しまれランドマークとなつていた旧芦屋国際ホテル(六麓荘町 戦後は芦屋大学)、金川邸(伊勢町)、竹内別荘(東芦屋町)と、それぞれ山手と浜手で風景を飾つていた名建築が平成七年頃までにいずれも姿を消してしまった。本市における文化遺産である個人所有による洋館建築が数少なくなるなか、今後、い



かにして継承するかは本市における課題でもある。

一方で、ランドマークとなってきた建築でも、芦屋郵便局電話事務所や、芦屋警察署、仏教会館といった公共的な近代建築物については、保全が図られている。芦屋警察署は、平成十三（二〇〇一）年に旧館を保全した建て替えが行なわれ、仏教会館は、道路拡幅によりわずかに移動することになったが、全面的に保全された。また芦屋郵便局電話事務所については、今日、料理店として商業的に活用されている。

### 三、御影石の石垣とカイズカイブキの生垣

#### 御影石の石垣

本市の市街化の広がり、近世からの村落を中心として、明治末から昭和初期にかけての郊外住宅地開発によるものであった。

特に、芦屋川周辺や海岸部から別荘地が広がり、最後に山の手に展開された。その時代の市街地は、お屋敷町として戦後も継承されていく。

そこには先にみた洋館建築などの歴史的建築物を残したが、これらの点的な地域資源の一方で、このお屋敷町に連続的な景観を織り成したものもある。御影石の石垣と、カイズカイブキの生垣である。御影石は、背後にそびえる六甲山に産した六甲花崗岩であり、積み出し地であった御影（神戸市）という地名が冠されている。本市でもこの石材は産出され、徳川時



5-5 御影石の石垣

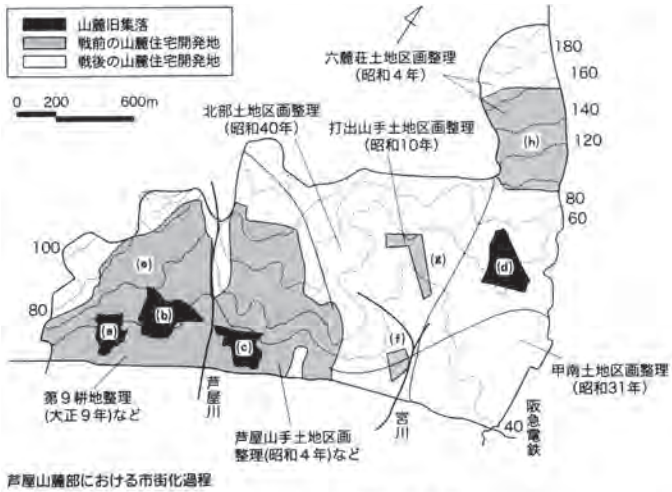
代の大坂城へも無数に運ばれたのは周知の事実である。当時に採石した大名の家紋の入り刻印石が、市内で散見できることも知られている。この御影石は、昭和四十年代まで、地元でも流通しており、本市でも斜面地という地形的特性から無数に石垣や石塀に使われてきた(5・5)。しかも、宅地造成の際には、地中から無数の石材が出土した。そうした石材を、その現場で積み上げ、石垣や石塀にすることができた。石はピンク色を呈し、芦屋の街の色のひとつとなっている。こうした石垣が、白砂の地面とあいまって文学作品にも描写されてきた。

六甲山の岩肌と市街地の石垣、そして芦屋川の川床の色が、一体となって本市の風土色ともなってきた。しかし、お屋敷町の建物更新や、相続による取り壊しなどにより、この景観は、少なからず変化を余儀なくされている。

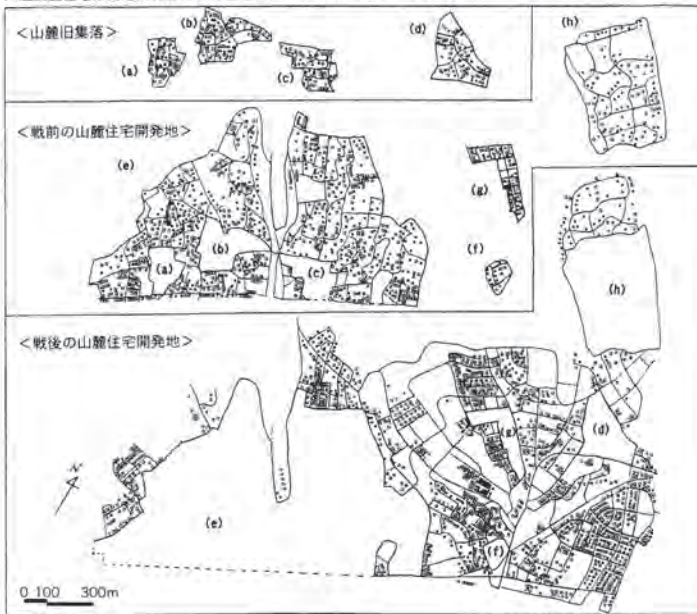
#### カイズカイクキの生垣

カイズカイクキの生垣も、石垣とセットになって地域景観を成してきた。この種の生垣は、関西特有の景観でもあり、御影石の石垣とあいまって本市の風土的景観といえよう(5・6)。しかし、石垣も生垣と共に、邸宅の細分化や、駐車スペースの設置や、住宅デザインの变化によって、姿を消しつつある。

しかし、今日も市内の工事現場からは石が掘り出される。それらは活用されることは少なく処分されている。庭園都市をめざす本市においても、こうした地域資源を大切にしたいものである。わが国の庭園では緑だけでなく、石も重要である。本市の色を構成するこうした素材は大切にされてきた。平成二(一九九〇)年、市役所の新庁舎が完成したが、周辺に建つお屋敷街の石垣の景観にあわせるように、一階部分に石が張られた。地元の石の色彩に近い他県産の花崗岩が用いられた。このように本市には根強くこの色彩への意識がみられる。また震災



芦屋山麓住宅市街地における地場石垣ストック (調査時期：1996年2月)



5-6 御影石の石垣の分布図  
(出典)『石の街並みと地域デザイン』 三宅正弘著

後、「若宮まちかど広場」などでも、朝日ヶ丘のマンション工事現場で出土した石や、ほかに本市のお屋敷で使われてきた庭石、手水石、沓脱石、また大阪城に運ばれるために大名の刻印が入った刻印石、また阪神国道電車の敷石など、本市にゆかりのある御影石で公園や広場がデザインされている。

本市では工事のたびに日々、地場石材が出土する。先人たちが何世紀にもわたり築いてきた地域固有の風景の保全のためにも、今後これらの石をためておき活用していくことも大切ではないだろうか。

#### 四．文学に描かれた芦屋の姿

##### 村上春樹・谷崎潤一郎など

昭和四十五（一九七〇）年の芦屋を作品に登場させた村上春樹は、「海から山に向かつて伸びた惨めなほど細長い街だ。川とテニス・コート、ゴルフ・コース、ずらり並んだ広い屋敷、壁そして壁、幾つかの小奇麗なレストラン、ブティック、古い図書館、月見草の繁った野原、猿の檻のある公園、街はいつも同じだった」とデビュー作『風の歌を聴け』で書いている。ここにもお屋敷町の壁の景観、そして旧松山邸洋館の図書館とモダニズム時代の名残が伺われるが、加えてレストラン、ブティックなど新しい芦屋も登場する。

ところが、村上は、のちの作で変容する芦屋も登場させている。「僕は川を離れ、かつての海岸道路に沿って東に歩いた。不思議なことに古い防波堤はまだ残っていた。海を失った防波堤はなんだが奇妙な存在だった。僕は昔よく車を停めて海を眺めていたあたりで立ちどまり、防波堤に腰かけてビールを飲んだ。海のかわりに埋立地

と高層アパートが眼前に広がっていた。のっぺりとしたアパートの群れは空中都市を作ろうとして」と『羊をめぐる冒険』に記している。

「僕らが住んでいた町は、見事に典型的な大都市郊外の中産階級の住宅地だった。そこに住んでいるあいだに多少なりとも親交を持った同級生たちは、みんな比較的小奇麗な一軒家に暮らしていた。(中略)アパートとかマンションに住んでいる人間を、僕はその当時誰一人として知らなかった。僕があとになって近くの別の町に引越すことになったが、そこもだいたい同じような成り立ちの町だった。だから大学に入って東京に出てくるまで、通常の人間はみんなネクタイをしめて会社に通い、庭のついた一軒家に住んで、犬か猫を飼っているものと僕は思い込んでいた」と『国境の南、太陽の西』に書いている。

村上が過ごした昭和三十・四十年代の本市のことであろう。そこには、少しずつ変化するお屋敷町の姿、つまり新市街やお店がみえる。

しかし、村上は戦前の本市を書いた文学者とも少なからず共通することも書いている。それは昔屋の川床や、山の花崗岩が砕けて広がる地面である。

「白い砂の道だけが残る。僕は散歩のついでにそんな道を上流まで辿り、川が川床に吸い込まれていくポイントを探したものだ。そこでは流れの最後の細い一筋がふと何かをみつけたといった感じで立ち止まり、そして次の瞬間にはもう消えていた。地底の闇が彼らをそっと呑み込んでいった」(『羊をめぐる冒険』)

村上の書く白い砂の道や川床とは、モダニズムの時代から作家たちの目に映った風景であった。谷崎潤一郎も

『細雪』で、この花崗岩質の白い地面を、与謝野晶子も『沙上』で「武庫郡松のあひだを幾筋の沙河つらぬきて白きなりけり／芦屋川水絶えし日はしら沙を武庫の山風洗ふなるべし／沙床に泡の花ほど芦屋川水ながれたりかみにのほれば」と、村上と同じ川床に着目する。芦屋川の水が干上がった川床は、村上だけでなく、本市で育つ子どもたちが一度は想像力をかきたたせたことだろう。

### 第三節 芦屋の顔

#### 一．山と海のまちの拠点 スーパーマーケット

いかりスーパーとダイエー 本市における昭和四十年代までの商業地は、主に本通・三八通商店街のあった中心市街地と、市内に立地する鉄道駅・四駅の周辺部であった。中心市街地における商業地形成は、既に昭和初期に整い、また阪急・JR（国鉄）駅前の商店街も戦前期には形成されていた。

しかし、昭和四十年代以降の市街化は、市内東部（旧打出村）で、特に北部において三十年代から行なわれてきた北部土地区画整理や甲南土地区画整理の完成によって進行していく。前者の地区にはマンション建設が続き、後者には住宅が建ち並ぶ。それに伴い新たな商業も誕生してくる。大きなランドマークとしては、その両地区のエントランスにあたる場所に昭和五十二（一九七七）年に舶来日用食品などを扱ういかりスーパーが誕生す

る。さらにそれに伴い周辺部に商業店舗が形成されていった。

本市のスーパーマーケットの出現については、『新修芦屋市史』本篇にも詳しく、昭和三十四年から、駅前や中心商店街（三八通商店街）に隣接して創業されている。それに対して、既存の商店街からも独立した形で設けられたのがこのいかりスーパーであり、そこがまた新たな商業エリアの拠点となっていく。

ほかに昭和四十年に打出の浜手にくみあいマーケットの進出がみられ同じ年に浜センターが開設され、ここでも新たな商業エリアがみられた。

以上のように、昭和四十年代から五十年代にかけて、本市の東部（旧打出村）における山手と浜手の市街化によって、新たな拠点地域が生まれていった。

浜手については旧来の近隣商業の形態をとる一方で、いかりスーパーのある山手のエリアは、近隣に限られた商圈を対象とするものではなかった。東に隣接する西宮市を含めた広いエリアからの集客がみられるようになるのは車社会の定着とあいまった現象であった。このように、既存の商業地ではない地に新たな商業エリアが誕生した。車社会と連動した商業としては、昭和五十四年における芦屋浜のダイエーの誕生もそうである。

大規模店舗という要素もあいまって市域全体からの自家用車による集客がみられ、一つのランドマークとなった。いかりスーパーとダイエーと、ほぼ同時代に生まれたスーパーマーケットは、昭和後期における山手と浜手における二つのランドマークとなった。

**新しい芦屋の顔** 山手に「いかりスーパー」、浜手に「ダイエー」と新たなまちの顔が生まれていくなか

で、本市の玄関口となってきたJR 駅前にモンテメールが誕生する。マンションや高層建築が、山手や浜手に先行して林立するなかで、中心部の高層化がはじまった。モンテメールの命名は、フランス語の山と海を意味する。本市の特徴とされた山と海を楽しむ「二楽」が引き継がれた空間が、玄関口に誕生した。その二楽を楽しむ建物の完成は、昭和五十八（一九八三）年にはアルパ芦屋、昭和六十一年には国鉄芦屋駅前再開発「ラポルテ北地区」完成と続いていく。

日本旅館は、ラポルテのなかでホテルへとかわり、市場はビルの地下へと、賑わいの風景は、大規模建築のなかへと吸収されていった。

**二つの川がまちの軸に** 大規模な商業施設が形成されていく一方で、昭和四十年代後半からも良好な住宅街の環境や風景に恵まれた場所における住宅地に調和した店舗も立地していく。山手にレストランやブティックが点在しはじめ、また芦屋川に沿って、そのようなテナントが入るビルも並ぶようになった。

風致地区となっている芦屋川沿いには「市木」に指定されているクロマツなど既存の樹木を生かした設計や、建築物の高さ規制によって、高さのそろった建築物が建てられ連続的なスカイラインが形成されている。川と建築物があいまって、新たな河川景観が生まれていつている。一方、宮川沿いにも同様の店舗の形成がみられるように、芦屋川と宮川という本市の歴史的な二つの軸線は、まちの風景を飾っていくことになるだろう。しかし、芦屋川のスカイラインのように、宮川沿いの店舗立地にも独自の規制や誘導を考える必要があるだろう。



## 第四節 芦屋川の二つの核 その景観危機からの復興

### 一・景観の中心軸・芦屋川

#### 守るべき景観

芦屋川は本市の景観の中心軸である。緑深き六甲山と水面広き大阪湾をつなぎ、まちの姿を映す最も市民に親しまれている空間である。平成三（一九九一）年の本市のみどりと景観に関するアンケート調査によれば、芦屋らしいと感じられ、市民に最も好かれている景色としてほかの所を圧して断然多くの市民が芦屋川沿いの景観をあげている。その松並木や川越しの眺望などが好まれ、また守っていききたい緑も芦屋川の桜と松であった。ちなみに、景観の良い場所として断然多かったのが芦屋浜シーサイドタウンとＪＲ芦屋駅周辺で、三、四番目の国道四三号沿いと宮川沿いの倍近く市民が良いと答えている。

その芦屋川の景観の核となっている建築物が、山麓のヨドコウ迎賓館（旧山邑邸、以下ヨドコウ迎賓館という）とＪＲ神戸線沿いの仏教会館である。この南北二つの名建築は阪神・淡路大震災を乗り越えて存続しているが、その立地環境の激変に見舞われたにも関わらず、景観の核としての位置を今なお保つに至っている背後には多くの努力があった。特に市や都市基盤整備公団（現・都市再生機構）の公的機関関係者のあまり公にされていない努力の経緯を記しておきたい。

二二 北の核Ⅱヨドコウ迎賓館（旧山邑邸）



5-7 ヨドコウ迎賓館(旧山邑邸)



5-8 残された緑空中写真

**危機の克服**

大正七（一九一八）年アメリカの世界的建築家フランク・ロイド・ライトの基本設計により、桜正宗で有名な灘魚崎郷の山邑酒造八代目山邑太左衛門別邸として建設されたもので、大正十三年に完成した。国の重要文化財として、昭和六十三年保存修理が完工し、その結果もあって阪神・淡路大震災でもかろうじて一部破損で済み、調査修理を経て、平成十（一九九八）年一般公開が再開されるに至った（5・7）。

このヨドコウ迎賓館の裏山の邸宅の森となっていた土地が宅地開発されることが平成九年秋に明らかになった。芦屋川が六甲山から流れ出る源の山麓に位置し、楠などの大木の林に包まれるようにヨドコウ迎賓館は建っているのだが、この建築の背景となる緑は実は隣接する背後の敷地のものであった（5・8）。その樹木が開発によってなくなってしまう



5-9 山手南緑地

備され、芦屋川の北の核Ⅱヨドコウ迎賓館の緑の環境は永続的に守られることとなった。

### 三、南の核Ⅱ芦屋仏教会館

#### 環境保全へむけて

仏教会館は芦屋川（西岸）のほとり、JR神戸線のすぐ南に位置する。対岸には市民会館・ルナ・ホールがあり、ともに中流域から下流にかけての芦屋川景観の重要な核となっている。仏教会館は昭和二（一九二七）年に株式会社丸紅初代社長の伊藤長兵衛によって建設されたもので、建築設計は明治期から昭和初期に日本を代表する建築家であった片岡安による。

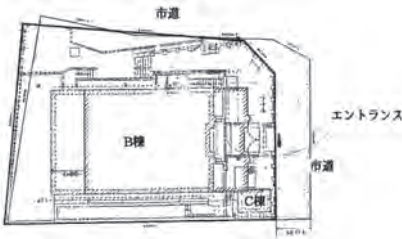
建物は鉄筋コンクリート造四階建ての洋風建築で、仏教に関する宗教的活動だけでなく多様な文化的施設とし

えば、芦屋川・六甲山の周辺環境と見事にマッチした名建築の価値は大幅に減ってしまう。

この背後の緑がなくなってしまおうという危機を、平成九年十一月にまず知った県西宮土木事務所と本市の文化財担当や風致担当による協議が始まり、「グリーンオアシス整備事業」の活用を前提に北村市長（当時）は平成十年二月に緑を保存するために一〇〇〇平方メートル程度を緑地として買収する判断を下した。それは震災復興途上の財政上非常に困難な時期での決断であった。結局、平成十年七月、約五億円で一八一平方メートルを買収し、山手南緑地（5・9）として整



5-10 芦屋仏教会館



5-11 曳家前後現況重ね図

て市民に親しまれてきた。特に昭和二十四から二十九年にかけては市立図書館として利用された。また、建築当初は地下に洋食レストラン、屋上をビアガーデンとして開放するなど、社交の場としての利用もなされてきた(5・10)。

阪神・淡路大震災によって、国道二号の南北、仏教会館を含む芦屋川の西部一帯は甚大な被害を受け、都市計画事業による震災復興土地区画整理事業が行なわれることになった。仏教会館の被害は軽微であったが、芦屋川沿いの市道を広げる計画がたてられたため、敷地東側の玄関前が四メートル削られ階段を含むエントランスや付属屋、玄関前樹木などが道路計画の中に含まれることになった。

仏教会館は重要文化財などの指定はされていないものの、ルナ・ホールなどと一体となった景観を形成している建物であり、本市を代表する芦屋川の景観の核であるという位置づけから、曳家保存工事が行なわれることとなった(5・11)。本体の建物が道路計画の中に含まれている訳ではないが、芦屋川と一体となった玄関前景観を保全するために工事が行なわれ、平成十五(二〇〇三)年に完了した。事業者である本市、事業を担当した都市基盤整備公団の関係者の震災で倒壊をまぬがれた歴史的建造物とその周辺の環境保全への熱意のたまものとい

える事例である。

## 第五節 まちの暮らし 新たな祭りとコミュニティ

### 一、新しいまちのコミュニティの形成とコミュニティ・スクール

**コミスクの活動** 昭和四十年代から市街地が広がるなかで、新しいまちにも小学校が新設されていく。昭和四十七（一九七二）年に朝日ヶ丘小学校、昭和五十年代になってシーサイドタウンに潮見小学校、打出浜小学校、浜風小学校、そして山手に三条小学校が誕生した。

戦前から続く精道、山手、岩園、宮川といった旧市街の小学校に対して、朝日ヶ丘小学校や潮見小学校などは、新しいまちの学校となる。そこにはまた新しいコミュニティの形が生まれてきた。コミュニティ・スクール（以下コミスク）とよばれるものである。コミスクとは、小学校の運動場、体育館、空き教室などを地域交流に活かすもので、陶芸、俳画など文化活動や、少年野球など活動が多岐に拡がっていく。夏祭りなども開催する。

昭和五十三年に三条コミスク、翌年に朝日ヶ丘コミスク、昭和五十六年に潮見コミスクと、新設された小学校で積極的なコミスク活動が、ほかの小学校区に先がけてスタートした。このようにコミスクは、新設された小学校区から始まっている。夏祭りは地域の祭りとして年々盛んになり、これまで伝統的な祭りがなかった朝日ヶ丘

では地域の大きな行事となっている。郊外住宅地として発展した本市にとって、趣味を介した集まりや夏祭りは、地域コミュニティの一つのあり方として定着した。

**先駆的な学校給食** 昭和四十年代以降に形成された市街地においても新たなコミュニティの姿が生まれたが、戦前から市内小学校で行なわれてきた先駆的なさまざまな取り組みは、新設校にも広がる。例えば学校給食である。

本市は、昭和二十年代より自校調理や給食設備など各校が文部大臣表彰をうけるなど、さまざまな取り組みを導入し高い評価を得ていた。そうした伝統も新設校に次々と受け継がれていった。各小学校による自校調理における創意工夫が練り広げられた。昭和五十一年、朝日ヶ丘小学校が学校給食優良学校として、県および全国表彰をうけ、昭和五十八年には潮見小学校も県教育長から表彰をうけた。朝日ヶ丘小学校では校歌で「リフトである給食」と歌われる（現在の校歌と異なる）などさまざまな試みも行なわれた。

当時価格変動の激しかった鯨肉などを物価の抑制を目的とした市からの助成借入金で共同購入（先買い）し、給食に提供していたが、昭和六十一年以降の世界捕鯨禁止によって鯨肉の給食への供給がなくなった。

これによって児童に人気であった「鯨の琥珀揚げ」などのメニューが消えていった。

**登山コミュニティ** 農漁村から発展した本市は、都市としての歴史を持たないことで、日常的に市民が集まるような象徴的な屋外空間はないが、六甲山系とちぬの海に囲まれた自然環境を活かしたコミュニティが形成されている。

それが「城山登山」である。身近な城山に、市民の多くが毎朝早朝に登っている。芦屋城山登山会は、六時に高座の滝を経て、六時半に頂上でラジオ体操を行なっている。本市の山は、ロックガーデンのロッククライミングなどが名所となっているが、他方で市民が山で会うというコミュニティ空間の側面を持っている。

コミュニティカレッジ・芦屋川カレッジ 開学して二十年以上経つが、毎年、入学希望者が定員を上回る。

芦屋川カレッジは、市立公民館が主催する満六〇歳以上の市民による高齢者大学である。昭和六十（一九八五）年秋に六か月課程としてスタートしたが、翌年には修了生が学習活動を継続できるように、芦屋川カレッジ学友会が設立された。昭和六十二年には、受講生からの熱心な希望によって一年課程に延長される。さらに平成三（一九九二）年には、修了生を対象とした芦屋川セカンドカレッジへと発展している。毎年多分野から気鋭の専門家が担当し、長年において毎回新たな企画で講義内容がまとめられている。熱心に企画するスタッフや自主的に運営を行なう受講生の協力によって他市ではみられない充実した高齢者大学となっている。卒業後の同窓会などでも学習を続け、高齢者による積極的なコミュニティ活動へと展開しており、このことも他市ではみられない本市独自の誇るべきコミュニティとなっている。

## 二. 市制五十周年 ケーキの街・芦屋

ケーキの街の形成 冒頭でみたヴィラやハイツといった名前がついたマンションの形成が住宅街において先行していったように、本市においては、住宅街から発信されていく産業も少くない。代表的な例としてケーキ

店の形成があげられよう。平成二（一九九〇）年の市制五十周年には、「あしやケーキフェスタ」が開催された。ケーキの街の形成は、昭和二十六（一九五一）年の本通商店街のギンザヤをはじめ、二十年代に同商店街に接して開店したエマンテでいずれも中心商店街ではじまった。

宣言に至るような出発点となったのは昭和四十四（一九六九）年である。同年に商店街ではなく、鉄道駅前が続々とケーキ店が誕生する。阪神芦屋駅前にモントルー、アンリ・シャルパンティエ、そしてJR（旧国鉄）芦屋駅、阪急芦屋川駅と続いていく。

さらに、先にみた市内東部（旧打出村）における山手の市街化に伴い、昭和五十年代から、いかりスーパードロに、芦屋ベニール、レーベンスバウム、琥珀亭などが開店していく。この商業立地は、中心商店街や駅前商業地とは異なる新たな拠点を生むこととなった。こうした店舗立地とあいまって他業種の展開が散的に進み始めた。平成以降も、この立地は住宅街へのベクトル（方向性）を強めた。店舗建築自体も、住宅を転用するものや、住宅の一部を店舗とするものなど、既存の商業建築とは異なる形態を生みだしていった。

### 三三 旧中心市街地の変容

**駅前商店街へ** ケーキ店の立地の変遷にもみられるように、芦屋の商業は、旧中心市街地の商業集積となっていた三八通や本通から、鉄道駅前へ、特にJR芦屋（旧国鉄）駅前に集積していった。昭和四十年代以前、市内の商店街、市場は、中心市街地に本通商店街、三八通商店街、甲陽市場、また阪急芦屋川駅前に山手商店



街、阪神打出駅に打出商店街、そして大東町に打出浜センターなどとなっていた。

活気ある従来の市場の風景はなくなり、大原市場は駅前再開発でラポルテに入り、甲陽市場も阪神・淡路大震災後の区画整理事業によってすがたを消した。そして甲陽市場が繋いでいた本通商店街、三八通商店街というアーケードを持った旧中心市街地の顔もまたすがたをかえた。本市の代表的な専門店が軒を連ねたアーケードを持つ商店街がなくなった。

しかし、アーケードがなくなり道は拡幅されたが本通、三八通ともに区画整理によって生まれたまちには、新しい住宅とともに店舗も点在し、少なからず歴史の面影が引き継がれ、住宅と店舗で織り成された新たなまちのすがたをみせている。

#### 四．まちの成熟

##### 道路愛称とバス停

昭和四十年代以降、新生芦屋が形成されてきた。マンション、企業社宅、公団住宅の建設であった。しかし、それは戦前からみられたようにお屋敷町や郊外住宅地のイメージが引き継がれる展開となった。また市内には、ケーキ店など、他市における店舗集積を上回るような業種も形成されていた。平成二（一九九〇）年、市制五十周年には「あしやケーキフェスタ」が行なわれる。しかし、これらもまた住宅地文化として育まれていったものだ。

昭和四十年以降にできたまちも、四十年を経て成熟を迎えている。例えば、公団住宅団地としてスタート

した岩園町も、まちへと成熟している。当初に設置されたバス停、「公団口」と「公団北口」は、昭和六十二（一九八七）年に市民から出された意向によって「公団口」が「岩園橋」へ、「公団北口」は「岩園町」と、土地にちなむ名となった。また団地に植栽されていたナンキンハゼの並木が、新緑や紅葉のトンネルを成すまでに育った。それは市民の誇りとなり、平成十一年、道路愛称募集で市民によって、「岩園並木坂」と命名された。昭和四十年代に形成された団地もまちへと成熟した。

この市民公募では、ほかに「ライト坂」や「宮川地藏通り」（5・12）など、市内に育まれた住宅地文化が反映された。世界的な建築家ライトによる邸宅や、また暮らしのなかで育まれてきた「橋ごと」にあるお地藏さんなどが名称に活かされた。

こうしてまちの成熟にしたがい、バス停が名称変更され、また新たな道路愛称が生まれる他方で、引き継がれる名称もある。昭和三十年代後半に国道四三号の建設でなくなった永保橋は、今もその名がバス停として残される。これまで芦屋川に架けられた橋には、業平橋、公光橋、月若橋、鶴塚橋など、能楽にちなむ豊かな名称も少なくなく、本市における文学資源が活かされてきた。先人達による工夫を、これからのまちづくりや、命名にも活かさなければならぬだろう。



5-12 宮川地藏通り

## 第六節 芦屋の曲がり角

### 一．まちのすがたの変貌

**マンションブームと新市民** 本市における第一次マンションブームは、昭和四十年代に一度迎えていた。ところが、平成に入り、その勢いは再び加速される。しかし、マンション用地として白羽の矢がたつていくのは、やはりかつてと同じように、お屋敷町であった。大きな邸宅がなくなるたびに、中層マンションが林立していく。個人邸宅から、集合住宅に変化することで人口密度は膨れ上がる。増加していく新住民は、こうした受け皿に迎えられていく。

人口増加を支えているのは、戦前から引き継がれていた邸宅跡地であって、新市民が増えていくなかで、一つずつお屋敷が消えていることでもある。

また昭和四十年代には新たなスタイルとして建てられた企業社宅もまたマンション用地となり、ゆとりある住宅の景観がなくなっていく。

### **住宅街ビジネスと来街者**

風光明媚な郊外住宅地として市街化した市域において、その環境と歴史的建築物が、また新たな地域資源となってきた。建造物は、ランドマークとしてまた地域イメージの形成に少なからず影響を与えていったであろう。また住宅街で展開されたケーキ店のようなビジネスは、市外からの来街者を惹きつ

けていった。

平成十年代に入りブライダルビジネスも増加している。歴史的建造物を活用した例、また山手の邸宅を改装する例、またベイサイドに新設する例など、いずれも本市の環境、つまり自然環境と住宅街環境の双方が基盤となったビジネスが展開されている。

しかし、それらのビジネスの基盤は、良好な居住環境や自然的かつ歴史的資源でもあろう。ところが、それら資源の保全については課題も少なくない。住宅街としての保全と、またニュービジネスの展開をどう調和していくか、市政の課題は重い。

新市民が増えていくが、来街者も少なからずまちのすがたに影響を与えていく。市内には、来街者が利用するフレンチやイタリアンのレストランが入れかわり立ちかわり形成される。近年では、休日にはブライダルを訪れる来街者も少なくない。いずれも戦前から本市に形成されてきた環境やイメージがそれらをひきつけた。戦前における荳屋のイメージは、この四十年で大きくかわってきた。にもかかわらず、そのイメージを利用する速度は増すばかりである。

将来に向けてストックを蓄積していくような方策を検討していくことも無意味ではない。この四十年が幕開けする前夜には、きわめて良好な資産をわれわれは受け継いでいた。しかし、次世代に何を伝えていけるかを十分に今検討しなければならぬ。